

近代日本における陽明学観の変遷

—大塩平八郎の評価との関連から—

1・明治期の陽明学理解と大塩平八郎

近代日本における儒教はそれ以前と比べて、重要度が低下したことは確かである。しかしそんな状況でも、陽明学は比較的注目を集めていた。ただし、王陽明など先学の思想を祖述する学問とは明らかに異なる。明治期以降では、陽明学の内容にどのような同時代的な意義があるのかという主張が大勢を占めた。そこにおいて、陽明学者として認識されていた大塩平八郎への評価は重要な意味を持っている。本論では、近代を通して陽明学理解が変化していった過程、またそこに、大塩平八郎に対する評価がどのように関わっているのかを探る。

明治から昭和にかけて活動した哲学研究者の井上哲次郎は、一九〇〇（明治三三）年に刊行した『日本陽明学派之哲学』の中で、陽明学が国民道德を理解するのに役立つと論じている。また、内村鑑三ら明治期のキリスト教の信徒たちも陽明学に着目していた。内村は近世までの日本の人物から五人を選んで、評伝『代表的日本人』を書いた。同書の中で西郷隆盛について、次のように述べている。

若いころから王陽明の書物には興味をひかれました。陽明学は、中国思想のなかでは、同じアジアに起源を有するもつとも聖なる宗教と、きわめて似たところがあります。それは、崇高な良心を教え、恵み深くありながら、きびしい「天」の法を説く点です。わが主人公の、のちに書かれた文章には、その影響がいちじるしく反映しています。西郷の文章にみられるキリスト教的な感情は、すべて、その偉大な中国人の抱いていた、単純な思想の証明であります。あわせて、それをことごとく撰取して、あの実践的な性格を作りあげた西郷の偉大さをも、物語っているであります。

ここで内村は、陽明学と「同じアジアに起源を有するもつとも聖なる宗教」としてのキリスト教に共通点があると書いている。西郷が、それらによって「実践的な性格を作り上げた」と説く。さらに内村は、西郷についてこのように評価する。

山村 奨

ところで、西郷の一生をつらぬき、二つの顕著な思想がみられます。すなわち、(一) 統一国家と、(二) 東アジアの征服は、いったいどこから得られたものでしょうか。もし陽明学の思想を論理的にたどるならば、そのような結論に至るのも不可能ではありません。旧政府により、体制維持のために特別に保護された朱子学とは異なり、陽明学は進歩的で前向きで可能性に富んだ教えでありました。^(四)

この文で注目すべき点は文末で、陽明学を朱子学と対比させて称賛している点である。内村は朱子学を「旧政府」すなわち幕府が体制維持のために用いた思想であるとみなし、それと異なる思想という意味で陽明学を評価している。

内村は、陽明学が日本の体制変革に貢献したと評価している。内村は朱子学を旧幕藩体制の象徴と捉えて、それに対して、西郷が学んでいた陽明学が明治維新に貢献したという構図を描く。よって内村の論理において、陽明学は単に反朱子学の思想ではなく、旧体制の変革を促した点で意義のある思想であった。井上もまた『日本陽明学派之哲学』で、西郷や吉田松陰らの名前を挙げて陽明学と維新との関係に言及している。^(五)

維新の志士が陽明学を奉じていたという見解は、井上や内村以前に三宅雪嶺が主張していた。三宅は、明治期における陽明学研究書の最初期に位置する『王陽明』において既に、西郷や高杉晋作が陽明学を修めていたと述べている。^(六) また三宅は、同書で大塩平八郎について次のように述べている。

彼れは自然に社会主義を得たるもの、而して竟に主義の為に斃れたるものなり。故に平八郎はたとえ人品に於て陽明の下に出づるとするも、其の知行一致の点に至りては確かに之より一歩を進めたるものなり。^(七)

大塩の行動に社会主義との共通項を見出して、称賛している。明治期において陽明学は維新の志士だけではなく、大塩の行動との関連でも語られていた。大塩と陽明学の関係は、井上哲次郎も考察している。井上は、困窮する民を救済しようとした大塩の心情には同情の念を寄せていた。^(八)

大塩の救民の姿勢を陽明学と結びつける点は、最近では荻生茂博が詳しく解説している。荻生は井上哲次郎らの「国家主義的陽明学」に対して、「個人主義的」陽明学の筆頭に大塩を位置付ける。^(九) 荻生が参考に行っている宮城公子の研究では、大塩に対して国家的視点より個人の内面の改良を重視する「主観唯心論」と評価された。^(一〇) その一方で明治期においては井上が大塩の過激な行動に批判的であり、大塩の奉じた陽明学にすら矛先を向けていた面がある。以下も、井上の文章である。

但々王学の結果は一視同仁の平等主義となるの傾向なしとせず。藤樹の如く分明に平等主義の観念を有せり。故に中斎が暴挙の如き自ら社会主義に合するものなしとせざるなり。^(一一)

中齋（大塩の号）の例を挙げて、陽明学が秩序を乱す思想に発展しうると説いている。井上は国民道徳論を主導する者として、社会主義に批判的であった。秩序を乱す大塩の行為を「暴挙」と称しており、陽明学をその要因であると問題視している。

また陽明学に批判的であった西周は、大塩へも否定的な評価を下す。

良知良能と、此の如く学は心を主として実知にありと雖も、其知たる五官より発する所の知にあらずして、唯己レが善シと知る所を以て推し及ぼすが故に、其弊害ある又大なりとす、我が大塩平八郎の如きは即ち其余波なり^(二二)。

既存の研究では、明治期において陽明学が批判的に受け入れられていた点が、大塩との関連で論じられることは比較的なかった。明治期において陽明学は反朱子学の思想という意味があり、好意的に受け取られていた。しかし、陽明学に秩序を乱す思想という主張も同時にあった。その根拠の一つが、江戸末期に衝撃を与えた大塩の存在であったことは間違いない。

2・陽明学への不信と石崎東国の陽明学

明治期になると、儒学が旧弊の象徴と受けとられたと一般的に言われる。丸山眞男の福沢諭吉への評価は、福沢が儒学の近代における価値を否定した点に由来する^(二三)。一方で丸山は、日本思想の近代性

が朱子学に反発した徂徠らの思想の展開にあるとした^(二四)。丸山の主張には様々な異論が提出されてきたが、特に近年では儒学の思想的蓄積がむしろ近代思想の構築に貢献したのではないかという考察がなされてきている^(二五)。その中でも近代化の壁としていわば（悪役）を担わされた反動のためか、宋学、特に朱子学に的をしばつた論考は少なくない。

それに対して陽明学は、体制派の朱子学に抵抗したという点で近代に意義があるという理解が今なお存続している^(二六)。前章で見たように、陽明学が維新に貢献したという視点は幕末から明治期にかけて、吉田松陰や大塩平八郎が「陽明学者」として注目を浴びたことに並行して生じた。そこには、朱子学が旧悪の象徴と考えられた背景があった。近代日本思想史における陽明学の意義は、この構図が明治以降の産物であることを念頭に置いて考えるべきである。

維新を導いた思想として概ね良好であった陽明学の印象は、明治末期に転機を迎える。一九一〇（明治四三）年五月に天皇暗殺の計画を立て、そのために爆発物を製造したとして宮下太吉らが逮捕された。その後八月にかけて幸徳秋水ら社会主義者が多数検挙され、大逆罪という罪により翌年一月には秋水ら一二名に死刑が執行された。世に言う「大逆事件」の直後、井上哲次郎がある政府側を支持する講演会の席上で、秋水や共犯の奥宮健之らと、陽明学の思想との関連を語った。その根拠は、秋水の師の中江兆民が陽明学を修めていたこと、健之の父、慥齋が陽明学者であったこととなつている。井上は同時に、陽明学と社会主義がともに危険であると語っている^(二七)。井上の指摘に対して、陽明学を奉じる人物、あるいは陽明学研究者からの異論が巻き起こる事態となつた^(二八)。

また井上の講演がある以前の一九一〇（明治四三）年から、既に事件に関連して陽明学を批判する言説が出てきた。元から問題視されることがあった大塩の行動も、批判の対象となる。それに対して井上の帝国大学（一八九七（明治三〇）年の京都帝国大学創立にともない、東京帝国大学に改称）での教え子の高瀬武次郎が、陽明学は社会体制と矛盾する思想ではないと反論するという一件もあった。^(三二)高瀬のように陽明学を擁護したい立場にとつて、乱の首謀者である大塩はやっかいな存在であった。

荻生茂博が大塩を積極的に評価していたことは、前章で述べた。荻生は大塩の他に、石崎東国という人物を評価している。石崎は大塩に心酔して、明治末期〜大正期に陽明学の顕彰をおこなった在野の研究者である。以下では石崎の陽明学理解を中心にして、陽明学と大塩への評価が、同時代にどのように変化していったのかをたどる。

石崎東国は、本名を石崎酉之允（とりのじょう。または、とりのすけ）という。自伝によれば水戸の近郊で生まれ、藩校弘道館に出入りして水戸学を学んだとある。この時既に、陽明学にも触れていたという。水戸藩の政争が起こる中で「革命家」（石崎の言）の出入りが激しく、「コンナ土地であるから王陽明の出身蹟乱録も水戸学を資する一部として読まれたものである」と述懐している。^(三三)石崎はやがて大阪に行き、労働問題や新平民の問題に関心を寄せる。それがきっかけとなり、「大塩と日蓮を研究した。陽明と日蓮との事業を見た。水戸学と陽明学の吻合を見た。会心の学問が初めて発見された」という。^(三四)石崎にとつて水戸学と陽明学、そして大塩の学問という三点は社会問題を接点として結ばれていたことが分かる。

一九〇七（明治四〇）年に石崎は、大阪で「洗心洞学会」を旗揚げた。これは大塩の学問を宣揚するための団体で、二年後に同会は東京の陽明学会と合併した。このために、「大阪陽明学会」と改称することになる。一九一〇（明治四三）年に「大阪陽明学会」は、独自の機関誌『小陽明』（四号から『陽明』）を発行する。石崎はその後一九一八（大正七）年に、再び大塩の業績を研究するために「洗心洞文庫」を立ち上げ、同時期に誌名を『陽明主義』と改題している。吉田公平の調査では、同誌は一九二五（大正一四）年まで刊行され、その後は石崎の体調不良などの理由で自然消滅したようである。^(三五)石崎は一九三一（昭和六）年に、この世を去る。

石崎は一九一八（大正七）年に、主幹を務める雑誌『陽明』の名を『陽明主義』と変えた際、新装第一号に「陽明主義宣言」という短文を寄せている。その文章は、以下のように結ばれている。

良知の働きや誠なり、愛なり、仁なり、推て之を社会に拡むれば社会人道立ち、拡めて之を充れば天地万物一体仁に化せざるはなし、人に於て良知といい、社会に人道といい、国家に王道という、理は天地一理にして道は古今東西に一貫す、人を救うの教、世を濟うの道、只これ陽明主義あるのみ。茲に陽明主義を宣言す。^(三六)

文章には国家を意識した記述も見られるが、井上ほど明確ではない。石崎には、陽明学による社会改良を求める主張が強い。石崎は第一次世界大戦について、科学的・物質的に発達した文明の行き詰

まりであると考^(二七)えた。さらに「軍国主義」と「資本主義」に、「陽明主義」が相対すると主張する。

軍国主義の世界を改造するという、而してその跡(ママ)資本主義の世になることを意とせない、彼等は政治をデモクラシーに立つべきことをいう、而も人間をデモクラシーにすることを知らぬ、彼等は霸王の世界を悪む、而も心は功利主義の奴隷となつて居る、モーツ早く言えば労働問題に熱狂する労働者彼等自らが資本主義気分を以て只機会を利用せんとするだけではあるまいか、学者の道徳を口にする愛国者の忠君愛国を説く、その道徳が口より消い(ママ)、その忠愛が止むに止まれざる心に根ざずしては稔りの時がない、人類社会一切の改造は先ず人類世界の創造から来たらねばならぬ、そは知行の合一に依らずして得らる可きでない、我が陽明主義の改造の哲学といわれる所以である^(二八)。

「陽明主義」とは、社会を改革するための思想としての陽明学を意味する石崎の造語である。石崎は自身の普及させる「陽明主義」によつて、「軍国主義」や「資本主義」が席卷する社会の改良を志望していた。また石崎はそれ以前から中江兆民に私淑しており、兆民について「人道の爲めに活動するに至てはモハヤ陽明家中にも稀に見る発展と云わねばならぬ^(二九)」と述べている。こうした一連の石崎の発想は、社会主義に親近感を持っている点が見られる。

ただし石崎は、体制批判を意図していた訳ではない。石崎が自身

の創設した「洗心洞学会」の名称を「大阪陽明学会」と変更したのは、大逆事件があつて大塩の行動が問題化していた時期でもあつた。石崎自身は、「大塩平八郎先生の塾名では兎角世間体がよくないからと云う人物が其頃多くあつて、それが為め陽明学会と改名した^(三〇)」と述べている。社会主義にも関心があつた石崎は、右のような論に敏感だったのである。石崎はむしろ、陽明学と謀反との關係を意図的に薄めようとしている。その上で陽明学を援用して、社会の問題点を穩健に改善しようと思つていた。

また石崎は大塩を重視していたが、大塩と水戸学の藤田東湖の共通性について文章を残している。大塩と東湖は同時代人であるが、特に親密な交流があつた記録は確認できない。その点は、石崎も認めて^(三一)いる。しかし石崎は、東湖が大塩の名を知つていたとした上でこう述べる。

東湖の施設として計画として重なる(ママ)ものは学校建設、均田法の実行、軍備の振肅、北海道の開拓策、神武陵の建修案等、当時太平の世に於ける此等の改革、若しくは改革案なるものは其頃水戸家の野心、水戸藩の謀叛とまで流伝されたのを見ても如何に天下の耳目を聳動せしめたかが分る。又東湖が自ら信じて行ふときに野心家又謀叛人の名さえ辞せざりしに見るも如何に猛烈な革命家であつたかが分る次第で、是の辺の性格に於ても少なからず東湖と大塩との間に相似たるもののあることと信^(三二)じられる。

東湖が社会改革の計画を実行に移す際に、断固として進んだことを指して「革命家」と称し、大塩との共通性を指摘している。石崎は東湖の改革を断行する精神に、大塩との共通点を感じていた。石崎にとって陽明学による社会改革の実践は、明治維新ということになる。よって陽明学を体制批判の思想ではなく、現体制を構築した思想として認める。その点で石崎の陽明学理解は、明治期における井上や内村らの理解と共通している。

石崎は吉田松陰の思想の由来について、次のように述べている。

彼の学問は青年水戸に出て会沢正志斎に国体論を聞き、佐久間象山に陽明学派の経世を聞きたるもの後の郵塾の学風を為す。松陰は就中象山の経世論に服し、その出所を尋ねて陽明学にあるを知り、伝習録、洗心洞割記の如きは遂に自ら愛読したるのみならず之れを以て書生に授く。東行（筆者注・高杉晋作の号）最も其学を説う。^(三三)

明治維新という革命が、水戸学と陽明学に由来しているとす。石崎の場合は陽明学が維新の改革に影響を与えたことで、陽明学を社会改革の思想と考えるようになった。石崎が陽明学による社会改革を主張したのは、大塩の行動と水戸学による感化、及び陽明学が維新を導いたという明治期の思潮によるものといえる。陽明学による社会改革という発想は、明治期の陽明学理解の系譜に連なっている。

さらに、同時代からの影響もある。石崎が積極的に文章を発表し

ていた時期は、工業化の進展による社会問題が表面化しはじめた時代と重なる。実際に石崎も、労働問題や差別の問題に関心を寄せていた。大逆事件に接して大塩の行為が問題視されたことは先述したが、元々庶民の間では一貫して人気であった大塩は注目を集めていた。一九〇八（明治四一）年に出版された『偉人研究 大塩平八郎言行録』は、大塩が「陽明学派の徒」^(三四)であったとした上で、次のように書く。

されば良知と太虚とは異名なれども、畢竟一たるものにして固より二たるものにはあらざるなり。太虚は靈明些の陰影を止めざる心の状態を指し、良知は所謂道德的意識にして、善悪を識別する吾人自然の本性を指せるなり。^(三五)

良知が「道德的意識」であるとして、善悪を判断する精神に帰せられている。著者の勝水瓊泉は大塩の救民のおこないを中心に書いており、大塩の陽明学が「善悪を識別する」とみなすことで、その行動との関連を持たせている。

元新聞記者で政治ジャーナリスト、衆議院議員でもあった中野正剛は、米騒動の最中（一九一八（大正七）年八月）に書いた随筆「大塩平八郎を憶う」^(三六)の中で、人々の困窮を救おうとして戦った大塩を称賛している。

全国各地の米穀騒動は、漸く危険なる風潮を伴い来りて、啻に天保八年大阪の変を想見せしむるのみに止まらざるなり。今日

此の時天下に一人の大塩なきか。吾人は乱徒としての平八郎を慕うに非ず、誠意一徹、死を以て所信を貫くの中齋を仰ぐのみ。反乱を企つるは尋常時に非ず、可否を論ずるは愚の極みなり、されど乱を成して猶お同胞の救世主たる者あり、賊と為りて猶お国家の守護神たる者あり。大塩中齋の如き、西郷南州の如き、即ち是なり。

右の文章では大塩の行動を必ずしも肯定している訳ではなく、状況に鑑みて可否を論ずるべきではないとする慎重な態度を取っている。大逆事件の衝撃が未だ尾を引いている感があるが、それでも中野は「同胞の救世主」たる大塩を称賛しており、大正期の社会問題に対して大塩の再来を求める。

なお、石崎も一九二〇（大正九）年に刊行した『大塩平八郎伝』の「自序」の末尾に、次のような言葉を書いている。

世は米価騰貴、食糧恐慌、一揆蜂起各地騷擾、京都、大阪、次第に焼打起り、軍隊出動、人心恟々、門外頻りに沙上偶語の人あり、即ち慨然として筆を抛つ。

石崎も大塩を顕彰する際に、同時代の米騒動のことを確実に意識していた。石崎は『大塩平八郎伝』の表紙において、自らを「洗心洞後学」とまで称している。石崎にとって陽明学を学ぶ目的が、大塩の精神を同時代に継承する点にあったことの表れである。石崎の陽明学による社会改革という視点は、社会に対してと同時に陽明学に

よって改革の精神を養うという内面に意識を向けるものであったといえる。

なお石崎が大塩の行動を陽明学による修養の結果であったとしたのと対照的な文章が、森鷗外の小説『大塩平八郎』である。同作は、大塩の乱を題材にして一九一四（大正三）年一月に発表された。鷗外は同作品の執筆背景を記した文章で、大塩とその乱の参加者について「彼等は未だ覚醒していない。唯盲目な暴力を以て富豪と米商に反抗するのである。平八郎は極限すれば、米屋こわしの雄である」と書き、否定的であった。鷗外はたしかに大塩を陽明学者と考えたが、その行為を暴力と捉え陽明学とは分けて考えている。

また、これまで鷗外の『大塩平八郎』は陽明学の観点の他に大逆事件との関連からも論じられてきた。大逆事件の影響を見る論考は、鷗外が大塩の貧民救済の姿勢を重視したと考えている。この貧民救済という姿勢を、鷗外の陽明学観によるものと見る見解もある。しかしこれらの鷗外が大塩の姿勢を肯定的に評価していたとする見解は、鷗外が大逆事件の暴力的な行動に批判的であり、大塩の行為も批判していた点を見逃している。鷗外が大塩の行動を陽明学と分けていた以上、陽明学には由来しないものと考えていたと見るのが妥当であろう。

鷗外が大塩の行動を非難したのとは異なり、石崎は大塩が陽明学によって救民のおこないをしたと考えた。石崎・鷗外の文章のいずれも大正期に発表されたものであるが、当時の知識人たちの大塩観は石崎に近い向きが多かった。大塩は民衆の救済者とみなされ、大塩が奉じた陽明学も救民の思想と認識された。

近代には、大塩を通じて陽明学に民衆救済の思想という価値が見

出されたことになる。大塩の存在は、近代日本の陽明学理解に大きな影響を与えていた。しかしながら、石崎の思想は他の大塩や陽明学を称賛した人物たちとは一線を画する。その理由は二つある。

まず石崎が「陽明宗」という言葉を用いて、陽明学を一種の宗教とみなしていたためである。管見の範囲では石崎が「陽明宗」という言葉を用いたのは一九一四年以降であるが、その四年前から既に「陽明学は学問ではなく、宗教である」と同志に語ったという証言があったり、高杉晋作らに対して「陽明信者」という呼称をあてたりして^(四五)。

また先述のように、石崎は少し後に自ら主宰した雑誌の誌名を『陽明主義』と改め、「陽明主義」が軍国主義や資本主義の席卷する世界を改革すると唱えた。この考え方は一見、陽明学を民衆救済の思想とした論理に沿うものに見える。実際にこれまで石崎について論じた研究では、そのような人物として石崎を描いている^(四六)。森田康夫は、大塩の思想を受け継ぐことで不平等社会の是正を求めた人物として、三宅雪嶺と石崎の名を挙げる^(四七)。

しかし石崎は「陽明宗」や「陽明主義」に明確な定義を与えておらず、石崎にとって陽明学は改革の思想というよりも一種の精神の改良法に近いものであった。石崎は改革のための具体的な方策を提示せず、陽明学の影響が世界に広がることでよりよい社会が実現されると考えていた。その姿勢は、先述したように石崎が東湖や大塩を例にして、陽明学が改革を実行に移す態度に資する思想とみなしていたことと通じる。大正期の他の知識人にも陽明学が社会改革の思想であるという認識は広がっていたが、石崎には陽明学が精神を鍛えることで世界が変わる理想論の面が強かった。

ただし石崎は一貫して、陽明学と国家体制が矛盾しないという態度をとっている。

元来、良心には裏も表もないのであるから知的は即ち行的で、現実即陽明学、陽明学即理想である、物を以てこそ内と外とは分ち、事に依つて名こそ変れ、忠君愛国、総ての道徳的立言、立行、立徳一に良知の発動、知行合一の所作であつて、忠君の為の忠君、愛国の為の愛国、道徳の為の道徳ではない^(四八)。

右の文章では、ふたつの点が示唆されている。一点目は、「知行合一」が実行を重視する思想であるとしていることである。これは、井上と同様の考え方である^(四九)。そしてもう一点は、陽明学における「良知」や「知行合一」に由来する場合であれば、忠君愛国や道徳は必ずしも否定されないことである。石崎は陽明学と現行の社会との接点について、「国」や体制を志向する精神を媒介としていたことが伺える。

先述のように、井上や内村も幕末の志士達が陽明学を奉じて明治維新を導いたと主張した。石崎も同じ立場をとっており、石崎の陽明学観は明治期の井上らの議論の延長線上にある^(五〇)。石崎が国家体制と矛盾しない改革を唱えていた理由は、明治維新が陽明学に由来するとの説を踏襲していたためといえる。陽明学を奉じた志士達が維新の改革を導いたのであるなら、陽明学を体制批判の思想として適用することはできない。むしろ石崎には、その改革の精神を同時代に活かして社会の改良を図ろうとする意識が強い。大塩を社会改革

者として見たのが、好例である。

これまでの研究では、石崎にとつての陽明学を社会改革の思想と見る意見が強かった。しかし石崎の陽明学観をより適切に表すなら、社会改良を目指すための精神修養という方が近い。それは大正期に大塩が民衆の救済者として認知されたことに、大きく影響を受けている。石崎はそうした時流の中で、大塩が奉じた陽明学こそ改革の精神を養う思想であると考えに至った。

3・昭和期の陽明学

最後に、昭和期に陽明学への関心を寄せた人物たちに言及する点とで、大塩の存在と関係する陽明学理解がどのように受け継がれたのかを考察する。その際に注目する人物が、二人いる。安岡正篤と三島由紀夫である。両者を取り上げる理由は第一に大塩への深い関心のためであるが、第二に近代日本の陽明学や大塩理解における彼らの位置づけが、充分にされてきたとは言いがたいためである。本章では今後のこの分野の研究のために、若干の提言もしたい。

安岡正篤は一八九八（明治三一）年に、大阪で生まれた。東京帝國大学に入学し、政治学科で西洋思想や東洋思想などを学ぶ。特に陽明学に深く関心を寄せたため、「自分の密かな学問の記念」として王陽明の伝記を書いた^(五二)という。それが、卒業の年に『王陽明研究』と題して出版される（玄黄社、一九二二年）。同書は、一九四二年（昭和一七）年までの二〇年間で一〇版を重ねた。安岡は後に、陽明学研究会も発足させた。

安岡は『王陽明研究』の中で、明治期以降に出版された書籍の中では以下の文献を参考にしたと明記している。

- 王陽明 三宅雄二郎
- 王陽明詳伝 高瀬武次郎
- 陽明学新論 同
- 達磨と陽明 忽滑谷快天
- 王陽明研究 桑原天泉
- 王陽明 亘理章三郎^(五三)

三宅雄二郎（雪嶺）の他、高瀬武次郎の著作が二点挙げられている点は興味深い。先にも少し触れた高瀬武次郎は帝國大学で井上に師事し、卒業後も井上の下で陽明学研究を行っていた。一九一二（明治四五）年から三年にわたり、中国大陸や欧州に遊学。帰国後は京帝國大学教授に就任した。高瀬に関する先行研究は少ないが、井上の陽明学研究の影響を強く受け、国家主義に陽明学を援用した人物と理解されてきた^(五四)。

しかし高瀬は『修養界』という雑誌を創刊し、陽明学による精神修養と社会への貢献を積極的に説いていた^(五五)。そのことは、高瀬の大塩への態度に明らかに表れている。高瀬は大塩の学問に対して「内省的方法を主とす。是れ中斎は心法を鍛錬するを主とし、唯心論を以て、学説の基礎とすればなり^(五五)」と評している。高瀬にとつて陽明学の要点は、精神修養にあった。

一方で安岡は、佐藤一斎宛の大塩の書簡を自ら現代語訳して『王

『陽明研究』に掲載している。ここでは、安岡が引用した以下の部分に着目したい。

かくて私（筆者注・大塩）の目的は要するに意志の純粹自由になり、その手段として、偏に純真なる内面的必然の要求を拡充してゆくべきことを悟りました^(五七)。

この文中で安岡は、二か所の脚注をつけている。一つは、「意志の純粹自由に在り」の直後である。この注では「中斎は同書に在以誠意為的と述べて居る。私はこの誠意を厳正なる意義に於て意志の純粹自由と解して差支無かるうと思う」と書く。もう一か所は、「内面的必然の要求を拡充してゆくべきことを悟りました」の一文に付されている。その注では「同書に所謂良知である。良知を素朴的に直覚と解するのは断じて取らない」と述べている^(五七)。安岡は、大塩が内面を非常に重んじるとみなしていた。

さらに安岡による右の訳文は意識がかなり入っており、安岡が精神修養を重視していたことを推測させる。よって安岡の陽明学解釈に、高瀬が影響を与えている可能性が十分考えられる。これまで安岡や明治期の高瀬が思想史研究で主流として扱われてこなかったのはもちろんのこと、両者の関係について考察した論は望むべくもなかった。今後の研究が待たれるが、ひとまず別稿を期したい。

なお小島毅は、安岡が陽明学において重視していた「人格」の語が井上哲次郎の訳語であったとして、井上の『人格と修養』という著作が安岡に影響を与えた可能性を指摘する^(五八)。たしかに「人格」と

いう言葉の創出は井上と思われるが、陽明の思想を学ぶことで「人格」の修養に役立たせることができると説いたのは、安岡が参考文献に挙げている亘理章三郎の『王陽明』である。亘理も、陽明学を人格の修養に用いることができると説いていた^(六〇)。安岡の『王陽明』に直接影響を与えたのは高瀬や亘理の著作であり、井上の影響は間接的であるといつてよい。少なくとも安岡自身の意識では、右の参考文献の著者から陽明学の思想を学んだと自覚している。

また安岡は、大塩について「暴徒のボスとはまるで違うのであります^(六一)」と評して、大塩が危険人物だと言われることに真つ向から反論している。安岡は大塩を陽明学者として高く評価しており、前記のような反論で念頭に置いていたのは三島由紀夫をめぐる状況であった^(六二)。

三島が陽明学への傾倒を標榜するのは、晩年になってからである。「革命哲学としての陽明学」は一九七〇（昭和四五）年九月、三島の死の二か月前に発表された。この中で三島が参照している文献は井上哲次郎が大塩について論じた文章と、鷗外の『大塩平八郎』である。この「革命哲学としての陽明学」は三島が話して記者が口述筆記した原稿を元にしており、三島が大塩の原典にあたった形跡もない。すなわち三島が参考にしたのは、井上と鷗外というフィルターを通した大塩像を示す文献に他ならない。

三島は井上の『日本陽明学派之哲学』の中から、大塩の文章を引用して次のように書く。

心がすでに太虚に帰すれば、肉体は死んでも滅びないものがあ

る。だから、肉体の死ぬのを恐れず心の死ぬのを恐れるのである。心が本当に死なないことを知っているならば、この世に恐ろしいものは何一つない。決心が動揺することは絶対ない。そのときわれわれは天命を知るのだ、と大塩は言った。これは大塩の思想のきわめて重要な部分であるから引用をしておく。

常人天地を視て無窮となし、吾れを視て暫となす。故に欲を血氣壯時に逞うするを以て務となすのみ。而して聖賢は則ち独り天地を視て無窮となすのみならず。吾れを視て亦た以て天地となす。故に身の死するを恨みずして心の死するを恨む。(中略)(ママ) 而して其心を動かして以て趨避するものは、則ち百歳の老人と雖も、実に夢生のみ、云々。

『日本陽明学派之哲学』第三篇、第一章―第四(ママ)

われわれは平八郎の学説を検討していくとこの辺りからだんだんと現代との共通点へ入っていく。われわれは心の死にやす時代代に生きている。しかも平均年齢は年々延びていき、ともすると日本には、平八郎とは反対に、「心の死するを恐れず、ただただ身の死するを恐れる」という人が無数にふえていくことが想像される。

このように三島は大塩の行動そのものより、そこに至る精神を高く評価している。言い換えれば、決死の行動を画った大塩の精神性に着目している。三島が大塩の行動に特別な感情を抱いていることは、同じく三島が鷗外の『大塩平八郎』について言及した箇所を見れば、より明確になる。

陽明学を革命の哲学だというのは、それが革命に必要な行動性の極地をある狂熱的認識を通して把握しようというものだからである。私がこう言うのは、学問によってではなく行動によって今日までもっとも有名になっている大塩平八郎のことをいまま思いうかべるからだ。大塩平八郎については、森鷗外に『大塩平八郎』という作品があるが、このすばらしい文章で書かれた中編の傑作にも、隙間風が吹いていることは否定できない。これは当然の話で、あくまでもアポロンの鷗外は、大塩平八郎のディオニュソスのな行動に対しては十分な感情移入をなしえず、むしろ一揆鎮圧に当った有能な与力坂本鉞之助のほうに視点をおいているのである。

「学問によってではなく行動によって今日までもっとも有名になっている大塩平八郎」について、三島は鷗外の解釈に距離を置いている。三島はそのことを、右の文章で鷗外と大塩の気質の違いに帰している。三島にとつて陽明学は、大塩を行動に促した激烈な思想であった。

またこの文章が発表された直後に三島の劇的な死があったために、その行動が陽明学と結びつけられ先の安岡の反論につながる。三島の陽明学理解は井上の著作から引用しているように、当時としてはいささか旧聞に属する研究によって陽明学を解釈していた。三島が大塩の行動に自らを重ね合わせていたことは、既に指摘されている。しかし、明治期の陽明学研究との関連が明確に論じられて

いるとはいえない。

三島は「陽明学を無視して明治維新を語ることはできない」と述べた上で、次のように書いた。

また、これと並行して、中江藤樹以来の陽明学は明治維新的思想行動のはるか先駆といわれる大塩平八郎の乱の背景をなし、大塩の著書『洗心洞筈記』は明治維新後の最後のナショナルな反乱ともいふべき西南戦争の首領西郷隆盛が、死に至るまで愛読した本であった。また、吉田松陰の行動哲学の裏にも陽明学の思想は脈々と波打っており、一度アカデミックなくびきをはずされた朱子学は、もとの朱子学が体制擁護の体系を完成するとともに、一方は異端のなまなましい血のざわめきの中へおりていき、まさに維新の志士の心情そのものの思想的形成にあずかるのである。

右の文章の中で語られている陽明学観は、いずれも明治期に生じた見方である。すなわち三島は、近代日本における陽明学のステレオタイプを忠実に踏襲していた。

大正期には、社会問題の顕在化にもなつて大塩が改革者として注目された。その時流の中で石崎は大塩に言及して、陽明学こそ改革を起す精神を養うと考えた。たしかに近代日本の陽明学は、陽明学が維新の源流になったという理解のために国体や社会改革に与するとされた面を持ち、一方で改革の思想とも受け取られた。しかし高瀬武次郎から石崎・三島・安岡に至るまで、陽明学は精神を鍛

える思想であるという内省重視の理解に発展していった。よつて近代日本における大塩理解を考察する際には社会改革者としての面ばかりでなく、陽明学を精神修養の思想として修めた人物という評価が重要になる。その点を考慮に入れた分析が必要であることを述べて、本稿を終えたい。

《注》

(一) 「若し我国に於ける国民的道德心のいかんを知らんと欲せば、其国民の心性を鍛鑄陶冶し來たれる徳教の精神を領悟するを要す、即ち此書叙述する所の日本陽明学の哲学の如き、豈に此に資する所なしとせんや」(井上哲次郎『日本陽明学派之哲学』(初版)富山房、一九〇〇年、序文)。井上の陽明学観については、岡田武彦「日本人と陽明学」(岡田武彦編『陽明学の世界』明德出版社、一九八六年所収)も参照。

(二) 内村の他に植村正久・海老名弾正・松村介石・本多庸一・新渡戸稲造などが、キリスト教徒であると同時に陽明学にも関心を懐いていた。彼らの父親は、いずれも藩士であった(工藤英一『日本キリスト教社会経済史研究』教育出版社、一九八〇年、四一—四六頁)。

(三) 内村鑑三著 鈴木範久訳『代表的日本人』岩波書店(岩波文庫)、一九九五年、一八頁。

(四) 内村鑑三著 鈴木範久訳『代表的日本人』前掲、一九頁。

(五) 「横井小楠、佐久間象山、西郷南洲、及び吉田松陰の如きは、直に陽明学派と称すべからざるも、亦陽明学より得來たる所あるは疑なし。果して然らば陽明学の近く維新の大革新に關係あること決して偉大ならずとせず」(井上哲次郎『日本陽明学派之哲学』前掲、五三五頁)。

(六) 三宅雄二郎(雪嶺)『王陽明』政教社、一九九三年、一二九—一三〇

- 頁。
- (七) 三宅雄二郎(雪嶺)『王陽明』前掲、「序」、六頁。
- (八) 「中斎が兵を挙げたるは、固より其忿怒の余に出で軽率の^{そと}譽を免れずと雖も、其窮民を慰むの心あるに至りては、未必(ママ)しも非難すべきものあるを見ず」(井上哲次郎『日本陽明学派之哲学』前掲、四四三―四四四頁)。
- (九) 荻生茂博『近代・アジア・陽明学』ペリかん社、二〇〇八年、四三五頁。
- (一〇) 宮城公子「儒教の自己変革と民衆」(『史林』四九卷六号、一九六六年十一月、一―四十頁)。大塩の思想における陽明学の位置は、宮城公子「大塩中斎の思想」(同編『日本の名著二十七 大塩中斎』前掲、五―五十二頁)を参照。
- (一一) 井上哲次郎『日本陽明学派之哲学』前掲、四〇八頁。
- (一二) 西周『百学連環』(大久保利謙編『明治文学全集三 明治啓蒙思想集』筑摩書房、一九六七年、五三―五四頁)。
- (一三) 丸山眞男著、松沢弘陽編『福沢諭吉の哲学 他六篇』岩波書店(岩波文庫)、二〇〇一年。
- (一四) 丸山眞男『日本政治思想史研究』東京大学出版会、一九五二年。
- (一五) 井上克人「日本の近代化と宋学的伝統―明治の精神と西田幾多郎―」(実存思想協会編『近代日本思想を読み直す 実存思想論集XVII』(第二期九号)理想社、二〇〇二年所収)。宮城公子「日本の近代化と儒教的主体」(宮城公子『幕末期の思想と習俗』ペリかん社、二〇〇四年所収)。渡辺浩『近世日本社会と宋学』(増補新装版)東京大学出版会、二〇一〇年、など。
- (一六) 小倉紀蔵『朱子学化する日本近代』藤原書店、二〇一二年。井ノ口哲也「朱子学と教育勅語」(『中央大学文学部 紀要』二五七号、二〇一五年二月、三七―六一頁)。井上厚史「中江兆民と儒教思想―『自由権』の解釈をめぐる」(『北東アジア研究』一四・一五号、二〇〇八年三月、一一七―一四〇頁)など。
- (一七) 『近代陽明学』とは、近世東アジア社会を支配した朱子学への対抗的な儒教と位置づけられ、より能動的で人間味に溢れた儒教であるという新しい意義が付与されたものを指す(澤井啓一「土着化する儒教と日本」『現代思想』四二巻四号、二〇一四年三月、八六―九七頁)。
- (一八) 井上哲次郎が、『日本陽明学派之哲学』の中で中江藤樹や熊沢蕃山らを「陽明学者」とした区分が現在に至るまで影響を保っている。それに対して小島毅は、藤樹らが必ずしも自身を「陽明学者」と認識していた訳ではないことを指摘する(小島毅『近代日本の陽明学』講談社〈講談社選書メチエ〉、二〇〇六年、一一三頁。また、小島毅『朱子学と陽明学』筑摩書房〈ちくま学芸文庫〉、二〇一三年、一〇頁)。ただし井上が彼らを「陽明学者」として記述する前に、三宅雪嶺が『王陽明』の中で既に藤樹・蕃山の他、三輪執斎、佐藤一斎、大塩平八郎の名を挙げている(三宅雄二郎(雪嶺)『王陽明』前掲、一一九頁)。よってこれらの区分は井上の創見ではなく、井上が定着させた認識である。
- (一九) 『東京朝日新聞』一九一一年二月六日付所載記事。井上の講演をめぐる詳細は、山村燧「明治期の陽明学理解―社会主義と明治維新との関係から―」(『東洋文化研究』一八号、二〇一六年三月、九九―一一八頁)を参照。
- (二〇) 実業家の渋沢栄一は陽明学者の東正堂が主催する陽明学会に所属しており、この講演会にも登壇していた。そこで井上の演説の内容を不快に思い、二、三名の会員とともに井上に苦情を申し入れたと自ら述べている(渋沢栄一「陽明学と身上話」『陽明学』四〇号、一九一二年二月、六〇頁)。
- (二一) 「原来陽明学は至誠惻愴の良知を以て君に対して忠、父母に対して

孝、朋友に対して信を尽くすが如き倫理綱常を以て主眼骨子とするものなり、之を陽明先生の一生に徴するに其の行動は悉く是忠君孝親朋友愛人に外ならず、寧王宸濠の反を平げ諸盜を誅せしは忠君の著名なるものに非ずや、其他家族に対する尊敬親愛の念は其の言に徴して明白なりとす、然れば吾人は王陽明先生の一生の言動を模範として進まば則ち王学の正旨に合し国家社会における善良なる人となるべし」(高瀬武次郎「陽明学の利病」『陽明学』二六号、一九一〇年、七一―八頁)。また、山村樊「井上哲次郎と高瀬武次郎の陽明学―近代日本の陽明学における水戸学と大塩平八郎―」(『日本研究』五六集、二〇一七年一〇月、五五―九三頁)も参照。

(三) 石崎東国「予が王学に入りし経路」(石崎東国『陽明学派之人物』前川書店、一九一二年所収)。この自伝が書かれたのは、一九一〇(明治四三)年である。この中で石崎は、「茲年予は三十八」と記している(同書、一七六頁)。この記述から吉田公平は、石崎の生年を数え年で一八七三(明治六)年と推定している(吉田公平「石崎東国年譜稿」『白山中国学』一三三号、二〇〇七年一月、四一―一二頁)。井形正寿も、成正寺過去帳の記述がその年になっていることを確認している(井形正寿「石崎東国の足跡を追う」『大塩研究』四八号、二〇〇三年二月、二一―三一頁)。ただし過去帳は一般的に本人の死後に書かれるものであり、生年に関しては特に昭和初期までの場合、必ずしも信頼できないこともある。一方で一九三一(昭和六)年の新聞に掲載された石崎の訃報記事には、「享年六十」と書いてある(『大阪毎日新聞』昭和六年三月二六日付所載記事)。これが正しいとすれば満年齢と数え年のどちらを採用しても、生年が一八七三年では計算が合わない。ただしこの記事の記述が数え年に基づいており、石崎が自らの年齢を満年齢で数えていたとすれば、ともに生年は一八七二(明治五)年で一致する。ここで注目すべきは、「明治六年二月五日太政官第三十六号布

達」により「民間に、数え年幾つ、満幾つと、二種の年齢をいうこととはなれり」という記述である(石井研堂『明治事物起原』橋南堂、一九〇八年、二三頁)。さらに、一九五〇年一月一日施行の「年齢となえ方に関する法律」(昭和二十四年五月二十四日法律第九六号)の第一項に、「国民は、年齢を数え年によって言い表す従来のならわしを改めて」とある。昭和二〇年代になっても、相変わらず民間では数え年での計算方法が使用されていたことが分かる。すなわち、石崎が明治四三年の時点で満年齢で計算しており、かつ死亡時には旧来の数え方が採用されていたとしても、不自然ではない。

(三) 石崎東国『陽明学派之人物』前掲、一七一頁。ここで石崎が言及している著作は、『皇明大儒王陽明先生出身靖乱録』である。明末の文人、馮夢竜(ふう・ぼうりゅう、またはふう・むりゅう、一五七四年―一六四五年)が書いたとされる王陽明の史伝である。日本でも、墨憨子(ぼくかんし、馮夢竜の号)『王陽明出身靖乱録』として刊行された。

(四) 石崎東国『陽明学派之人物』前掲、一七五―一七六頁。

(五) 吉田公平「石崎東国と大阪陽明学会の創設の頃―大阪における大塩平八郎―」(大塩事件研究会編『大塩平八郎の総合研究』和泉書院、二〇一一年、二九三―三一五頁所収)。

(六) 石崎東国「陽明主義宣言」『陽明主義』新年号(通巻八四号)、一九一九年一月、表紙表下部。

(七) 石崎東国「世界戦争の終りを見て―思想の力は武力に勝てり―」『陽明』八三号、一九一八年十二月、一頁。

(八) 石崎西之允(東国)「陽明主義の創造観(春季皇霊祭の日)」『陽明主義』四月号(通巻九九号)、一九二〇年四月、一頁。

(九) 石崎東国「兆民先生十周忌」『陽明』二巻六号、一九一一年十一月、三頁。

- (三〇) 石崎東国「陽明学より太虚主義へ。洗心洞後学」『陽明』五卷三号、一九一六年四月、一頁。
- (三一) 石崎東国『陽明学派之人物』前掲、五一頁。
- (三二) 石崎東国『陽明学派之人物』前掲、五五頁。
- (三三) 石崎東国『陽明学派之人物』前掲、一〇六一—一〇七頁。
- (三四) 勝水瓊泉編『偉人研究 大塩平八郎言行録』内外出版協会、一九〇八年、一四八頁。
- (三五) 勝水瓊泉編『偉人研究 大塩平八郎言行録』前掲、一六七頁。
- (三六) 中野正剛『魂を吐く』金星社、一九三八年所収。
- (三七) 中野正剛『魂を吐く』前掲、九一頁。
- (三八) 石崎東国『大塩平八郎伝』大鏡閣、一九二〇年、「自序」、八頁。
- (三九) 木下李太郎編『鷗外全集』第一五卷、岩波書店、一九七三年、七三頁。
- (四〇) 「平八郎は哲学者である。併しその良知の哲学からは、頼もしい社会政策も生れず、恐ろしい社会主義も出なかつたのである」(『鷗外全集』一五卷、前掲、七三頁)。
- (四一) 小田切英雄『近代日本の作家たち』厚文社、一九五四年。尾形仿『森鷗外の歴史小説—史料と方法』筑摩書房、一九七九年。山崎一穎『森鷗外 国家と作家の狭間で』新日本出版社、二〇一二年、など。
- (四二) 北川伊男「森鷗外の『大塩平八郎』と陽明学」(『皇学館大学紀要』八号、一九七〇年三月、三三七—三六〇頁)。
- (四三) 鷗外が大逆事件に触発されて書いたと評価されている『沈黙の塔』の中で、鷗外は「無政府主義」や「社会主義」の禁止については非難を加えていない(木下李太郎編『鷗外全集』七卷、岩波書店、一九七二年所収)。
- (四四) 詳細な考察は、山村奨「森鷗外における大逆事件と陽明学—井上哲次郎との比較による—」(『総研大文化科学研究』一三号、二〇一七年三月、二六五—二七五頁)を参照。
- (四五) 『陽明』五号、一九一〇年十一月。
- (四六) 吉田公平「石崎東国の中江兆民・ルソー論—『陽明』『陽明主義』の基調—」(東洋大学東洋学研究所編『明治期における近代化と(東洋的なもの)』東洋大学東洋学研究所、二〇〇七年、一三三—一三五頁)。荻生茂博『近代・アジア・陽明学』前掲、「Ⅲ・アジアの近代と陽明学」。
- (四七) 森田康夫『日本史研究叢刊十九 大塩平八郎と陽明学』和泉書院、二〇〇八年、第十章「大塩思想の継承者・三宅雪嶺」。及び同『日本史研究叢刊二十二 大塩思想の可能性』和泉書院、二〇一一年、第二章「大塩陽明学の近代思想への可能性」を参照。また森田は「不平等社会の是正」を求めた点で石崎の陽明学理解を井上と対置させており、荻生茂博の論と基本路線を一にしている(森田康夫『日本史研究叢刊二十八 大塩思想の射程』和泉書院、二〇一四年、第十二章「石崎東国と大正デモクラシー」)。
- (四八) 石崎西之允「吾等の主張は王道に在り」『陽明主義』十月号(通巻九三号)、一九一九年、一頁。
- (四九) 「朱子は先ず知りて後、行ふべしとすれども、陽明は知行の先後を言わずして、知行合一を主張せり。故に朱子は学理を重んじ、陽明は実行を尚ぶの異同あり」(『日本陽明学派之哲学』前掲、「叙論」、四頁)。
- (五〇) 「以上吾人は水戸学と陽明学なるものが、如何に緊密なる默契の下に明治維新の革命を醸成し、鼓吹し来れるかを感じずんばならず」(石東国(ママ)「水戸学と陽明学」『陽明』一〇号、一九一一年四月、三二〇頁)。
- (五一) 安岡正篤『王陽明—その人と思想—』致知出版社、二〇一六年、一〇頁。
- (五二) 安岡正篤『王陽明研究』(第七版) 玄黄社、一九四〇年、二八五頁。
- (五三) 吉田公平「高瀬武次郎年譜稿—東洋大学の漢学者たち(その一)」

―』(『井上円了センター年報』一五号、二〇〇六年、一六一―三二四頁)。荻生茂博『近代・アジア・陽明学』前掲、「Ⅲ アジアの近代と陽明学」。

(五四) 「吾人の修養は、煩悶を去って光明に入り、修養し得たる所に依て、社会に活動せんとするに在り。是れ吾人が特に活動的なる王陽明を模範にせんと欲する所以なり」(高瀬武次郎「発刊の辞」『修養界』一卷一号、一九〇七年六月、一―四頁)。

(五) 高瀬武次郎『日本の陽明学』榊原文盛堂、一九〇七年、一九四頁。

(五六) 安岡正篤『王陽明研究』(初版) 玄黄社、一九二二年、一一九頁。

(五七) 安岡正篤『王陽明研究』(初版) 前掲、一二〇頁。

(五八) 小島毅「人格の完成―王陽明の中に安岡正篤が見たもの―」(『陽明学』二〇号、二〇〇八年三月、一六七―一八〇頁)。

(五九) 佐古純一郎『近代日本思想史における人格観念の成立』朝文社、一九九五年。

(六〇) 亙理章三郎『王陽明』丙午出版社、一九一一年、三頁。

(六一) 安岡正篤『王陽明―その人と思想―』前掲、二二二頁。

(六二) 「昨今、新たに陽明学というものが、至る所で話題に上るようになり、あるいは一つの流行にすらなりかねない情勢にあります。そのきっかけの大きな一つは、おそらく三島由紀夫氏の自決でありました」(安岡正篤『王陽明―その人と思想―』前掲、一六頁)。

(六三) 三島由紀夫「革命哲学としての陽明学」(三島由紀夫『行動学入門』文芸春秋社〈文春文庫〉、一九七四年所収)、二二二―二四頁。

(六四) 溝口雄三は、三島を「心情的陽明学徒」と評している(溝口雄三ほか編『中国という視座』平凡社、一九九五年、一〇〇頁)。

(六五) 三島由紀夫『行動学入門』前掲、二〇三―二〇四頁。

(六六) 三島の死の翌日、新聞紙上に司馬遼太郎の寄稿文が掲載された。ここでは、吉田松陰が次のように批判されている。

「『知行一致』という、中国人が書齋で考えた考え方(朱子学・陽明学)を、日本ふうには純粋にうけとり、自分の思想を現実世界のものにしてしまうという、たとえば神のみがかるうじてできる大作業をやるうとした」(司馬遼太郎「異常な三島事件に接して」『毎日新聞』昭和四五年一月二十六日付東京朝刊所載記事)。

(六七) 小島毅『儒教が支えた明治維新』晶文社、二〇一七年、一九―二〇頁、など。

(六八) 三島由紀夫『行動学入門』前掲、一九五頁。

引用文において、原文の旧字体・旧仮名遣いは新字体・新仮名遣いに改めた。また読みやすさを考慮して、適宜句読点を補った箇所がある。